

機関番号：32704

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20310155

研究課題名（和文）セクシュアリティ、ジェンダー、アイデンティティの構築資源としての日本語研究

研究課題名（英文）A Study on Japanese Language as a Linguistic Resource of Sexual and Gender Identity Constructions.

研究代表者

中村 桃子 (NAKAMURA MOMOKO)

関東学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30205372

研究成果の概要（和文）：第一に、スパムメール、親密な関係を扱った小説、日常会話を分析し、「女ことば」や「男ことば」が、異性愛規範に沿ったセクシュアル・アイデンティティ構築に利用されていることを明らかにした。第二に、マスコミの多様なセクシュアル・アイデンティティ遂行とことばの実践を考察し、その歴史的な変動を明らかにした。第三に『ことばとセクシュアリティ』（邦訳）を出版した。第四に、多くの国際学会でこれらの研究成果を発表した。

研究成果の概要（英文）：First, by analyzing spam-emails, novels dealing with intimate relationships, and natural conversation, we have demonstrated that Japanese women's and men's languages are used to construct sexual identities conforming to heteronormativity. Second, we have studied linguistic performances of sexual identities in mass media and delineated how the performed identities have been historically transformed. Third, we have published the Japanese translation of *Language and Sexuality*. Fourth, we have presented the results of these studies at many international conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：言語とジェンダー研究

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：セクシュアリティ、談話研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の言語とジェンダー研究は、二つの大きなパラダイム変換を経験した。一つは、言語をアイデンティティ構築の際に利用できる資源とみなす視点である。ポスト構造主

義以降、言語行為は、あらかじめ付与されたジェンダーに基づいているのではなく、話し手が様々なジェンダー・アイデンティティを創造する実践とみなされた。

(2) 二つ目のパラダイム変換は、セクシュア

リティへの注目である。言語とジェンダーの関係性を明らかにするためには、異性愛に埋め込まれたジェンダーの支配関係を考慮することが不可欠であることが主張された。

しかし、これら二つのパラダイム変換が日本語研究に十分反映されているとは言い難い。

2. 研究の目的

(1)本研究は、大きく四つの目的を持っている。第一は、セクシュアル・アイデンティティを構築する資源としての日本語の特徴を明らかにすることである。

(2)第二は、日本語に刻まれている異性愛が、どのように乗り越えられているのかを分析することである。

(3)第三は、セクシュアリティの側面から日本語を分析する重要性を国内に発信することである。

(4)第四は、日本語がことばとセクシュアリティについて明らかにできる理論的貢献を国外に発信することである。

3. 研究の方法

(1)第一の目的のためには、小説・翻訳・教科書・文法書などをデータとして使用し、語や文の単位を超えた言語使用を対象とする談話研究の手法で分析する。

(2)第二の目的のためには、メディア、ならびに、インタビューをデータとして使用し、談話研究の手法で分析する。

(3)第三の目的のためには、Deborah Cameron & Don Kulick 著 *Language and Sexuality* (Cambridge University Press 2003) の邦訳を出版する。

(4)第四の目的のためには、国際学会における報告、ならびに、学会誌への寄稿を行う。

4. 研究成果

(1)上記の四つの研究目的に沿って、研究成果を述べる。第一の目的は、セクシュアル・アイデンティティを構築する資源としての日本語の特徴を明らかにすることであった。そこで、日本語の「女ことば」と「男ことば」が異性愛アイデンティティを構築する言語資源としてどのように使用されているのかを、スパムメールをデータに分析した。その結果、「女ことば・男ことば」は直接異性愛の性的欲望を表現する資源としては使われていないことが明らかになった。ていねいで間接的な「女ことば」は、女性は自分の性的欲望を直接表現しないという異性愛規範に沿って機能しており、男性に女性の性的欲望を解釈させ、女性が性的主体性を放棄する結果を導いている。一方、「男ことば」は、男性が女性に性的欲望をアピールするために使われるというよりも、男性同士がホモソー

シャルな親しさを醸造するために使われる。自然な衝動だと理解されがちな性的欲望の表現も、異性愛規範のコードに従っている。日本語の伝統として肯定的に捉えられることの多い「女ことば・男ことば」も、異性愛規範の再生産に好都合の言語資源として機能しているのである。この研究を2008年に国際ジェンダー言語学会で発表した結果、高く評価され、学会発表者の一部が執筆している *Femininity, Feminism and Gendered Discourse* に収録された。

また、実際の男女が話す日常会話を日本社会に流布するジェンダー規範意識との関連から分析した。談話分析の手法を用いて会話の話題展開の仕方に注目し、参加者がどのように会話の主導権を握り、相手をどのように遇するのか、すなわち、位置取りの分析を行い、その後、それらの会話データを提示して印象調査を行った。その結果、男同士の会話では、お互いが主体的にリードする立場を奪い合う形で会話を進めること、女同士の会話では双方の了解を探りながら会話を進めていくことが分かった。さらに主体的に会話をリードする試みを行わない男性話者への評価が低くなることも判明した。これは、男らしさ・女らしさに関して流布している言説が会話方略にも具現化されていることの証であり、規範意識という目に見えない価値が具体的な会話場面で日々再生産されていることが明らかになった。この成果は2010年のアジア学会、国際ジェンダーと言語学会、マレーシア国際外国語学会、2009年の国際語用論学会、2008年の国際ジェンダーと言語学会で発表した。

また、小説メディアの表象研究を行い、「女ことば・男ことば」や呼称という手段を通じてジェンダー規範が維持されている様子を明らかにした。とくに親密性意識の変化に伴って親子や恋人といった親しい人との間で交わされる会話に変化が生じていることを指摘した。そこでは、「女ことば・男ことば」が話者の性別と結びつくというよりは、登場人物の性格を描き分ける手段として用いられるようになっていくと同時に、恋人という枠の中では従来型のジェンダー規範が堅持されている様子が明らかになった。この成果は2008年の国際ジェンダーと言語学会、日本語用論学会で発表を行った。

さらに、バラエティ番組の分析を通して、ゲイコミュニティに親しまれている「オネエ言葉」がタレントに使われることにより、「オネエキャラのことば」という新たなスタイルへと変動していることが確認できた。そこでは、マスコミにおける新たなジェンダー・セクシュアリティの表象を可能にしつつも、「お笑い」というジャンルに囲い込むことにより逆説的に異性愛規範を強化する働きを

も秘めていることが見えてきた。

(2)第二の目的は、日本語に刻まれている異性愛が、どのように乗り越えられているのかを分析することであった。そこで、大手新聞等におけるセクシュアルマイノリティ話者の言語表象を考察し、その歴史的変遷を追った。その結果、70年代では「おかまの話し方」として蔑視されていた言葉が、90年代のゲイ・ブームを経て週刊誌などで、ゲイコミュニティ内で使われている特殊なことばとして登場し、2000年前後におネエキャラの知名度と人気が増加するとともに、「オネエ言葉」が徐々に認識度を上げ、「おネエキャラのことば」として主流メディアへと超越していったことが明らかになった。その半面、セクシュアルマイノリティ話者のインタビューからは、メディアに登場するスタイルとコミュニティで使われているスタイルが一致していないことも見えてきた。セクシュアルマイノリティの話し手は、日本語に刻まれている異性愛の言語資源を取り入れながら、その意味の複合性を生かし、異性愛規範をときには逸脱し、ときにはパロディ化する形で、異性愛規範を切り抜けて乗り越えていることが明確になった。この研究成果は、2009年の国際語用論学会、2010年の国際ジェンダーと言語学会並びに2010年のクィア学会で発表され、2011年に単著の予定がある。

今後、ジェンダーで明確に区別された「女ことば・男ことば」を持つ日本語が異性愛を再生産するメカニズムを明らかにすることで、言語とセクシュアリティのかかわりに理論的な貢献ができると考える。

(3)第三の邦訳書は、2009年に『ことばとセクシュアリティ』として三元社より出版した。

(4)第四の学会発表は、科研費の補助をいただいたおかげで以下の学会において発表し、日本語研究の重要性を主張することができた。2008年度は、ニュージーランドのビクトリア大学で開催された第5回国際ジェンダー言語学会でパネル発表と個人発表を行った。2009年度は、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学で開催されたカナダ人類学会、オーストラリアのメルボルン大学で開催された第11回国際語用論学会、ならびに、アメリカのフィラデルフィアで開催されたアジア研究学会で発表を行った。2010年度は、本研究グループが第6回国際ジェンダー言語学会の東京大会を主催し、発表を行った。また、マレーシアのプトラジャヤで開催されたマレーシア国際外国語学会、ならびに、アメリカのホノルルで開催されたアジア研究学会で発表を行った。研究計画では、2010年に学会誌への寄稿を予定していたが、応募するに至らなかった。引き続き研究を継続し、寄稿したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計13件)

- ① 中村桃子、Affect and Gender in Colonialism: Emotional Attachments to Japanese Women's Language. *Proceedings of the 6th Biennial International Gender and Language Association Conference*, 2011、査読無 pp. 1-10.
- ② 中村桃子、Theorizing the Constructive-Ideological Approach to Japanese Women's Language、自然・人間・社会、査読有、50号、2011、pp. 1-25.
- ③ 中村桃子、Emotional Attachments to Japanese Women's Language: Language, Gender, and Affect in Colonialism、自然・人間・社会、査読有、49号、2010、pp. 1-27.
- ④ 中村桃子、Desiring One Imperial Language: Affect, Gender and Colonialism、自然・人間・社会、査読有、48号、2010、pp. 1-27.
- ⑤ 佐藤響子、恋愛小説：ことばで作る親密な関係性」中村桃子編(他10名、6番目)『ジェンダーで学ぶ言語学』査読無、世界思想社、pp. 107-121.
- ⑥ 中村桃子、Language as Heterosexual Resource、自然・人間・社会、査読有、47号、2009、pp. 1-23.
- ⑦ 中村桃子、Metalinguistic Practices vs. Subversive Practices、自然・人間・社会、査読有、46号、2009、pp. 1-20.
- ⑧ 佐藤響子、親から子への自称詞使用実態とアイデンティティ構築、横浜市立大学論叢、査読有、59(1-2)、2008、279-300.
- ⑨ 中村桃子、異性愛の言語資源としての「女/男ことば」、日本語用論学会大会研究発表論文集、査読無、4、2008、pp. 209-212.
- ⑩ 中村桃子、How Metalinguistic Comments Suppress Subversive Practices、*Proceedings of the 5th Biennial International Gender and Language Association Conference*、査読無、2008、pp. 291-304.
- ⑪ 中村桃子、Women's and Men's Languages as Twisted Heterosexual Resource、*Proceedings of the 5th Biennial International Gender and Language Association Conference*、査読無、2008、pp. 277-290.
- ⑫ 中村桃子、Masculinity and National language: The Silent Construction of a Dominant Language Ideology、*Gender and Language*、査読有、2. 1、2008、pp. 25-50.

- ⑬ 中村桃子、ホモソーシャル・ファンタジー——スポーツ新聞の世界、自然・人間・社会、査読有、45号、2008、pp. 1-23.

[学会発表] (計 22 件)

- ① 中村桃子、Affective Attachments to Japanese Women's Language: Language, Gender and Emotion in Colonialism. the AAS (The Association for Asian Studies) / ICAS (the International Convention of Asia Scholars) Joint Conference. 2011 年 4 月 1 日 Honolulu, U. S. A.
- ② 中村桃子、Metalinguistic Practices in Negotiating Gender/ Sexual Identities. Malaysia International Conference on Foreign Languages、2010 年 12 月 1 日、Universiti Putra Malaysia (Putrajaya Malaysia)
- ③ 佐藤響子、Interactional Dynamics: Co-construction of Masculine Identity in Conversations of Japanese Youth, Malaysia International Conference on Foreign Languages、2010 年 12 月 1 日、Universiti Putra Malaysia (Putrajaya Malaysia)
- ④ マリイ・クレア、超越する言葉、クィア学会第 3 回大会、2010 年 11 月 21 日、中京大学 (名古屋市)
- ⑤ 中村桃子、Plenary Speech. The Genealogy of Japanese Women's Language: A Historical Discursive Approach to Gender, Power, and Identities. The 6th International Gender and Language Association Conference, 2010 年 9 月 18 日, Tsuda College (Tokyo, Japan).
- ⑥ マリイ・クレア、Queer(y)ing J-TV, The 6th International Gender and Language Association Conference, 2010 年 9 月 19 日, Tsuda College (Tokyo, Japan)
- ⑦ 佐藤響子、Subtle Power Politics and Positioning Observed in Japanese Conversations: A Trail of Micro-Macro Links in Interaction, The 6th International Gender and Language Association Conference, 2010 年 9 月 18 日、Tsuda College (Tokyo, Japan)
- ⑧ マリイ・クレア、おネエキャラのことば— J-TV におけるジェンダー・セクシュアリティ、愛知淑徳大学ジェンダー・女性研究所主催連続講座、2010 年 6 月 19 日、愛知淑徳大学 (愛知県)
- ⑨ 中村桃子、Gender-Crossing? The Use of Male Personal Pronouns by Girls. Association for Asian Studies Annual Meeting, 2010 年 3 月 27 日, Philadelphia Marriott Downtown (USA)
- ⑩ 佐藤響子、Border-crossing in Conversations of Young Japanese Males and Females, Association for Asian Studies Annual Meeting, 2010 年 3 月 27 日, Philadelphia Marriott Downtown (USA)
- ⑪ マリイ・クレア、OneeMANS: Queer(y)ing the Talk of Make Over J-TV, The World Outgames 2009 Human Rights Conference, 2009 年 7 月 28 日, IT University Copenhagen (Denmark)
- ⑫ 中村桃子、Negotiating Gender/Sexual Identities, The 11th International Pragmatics Conference, 2009 年 7 月 13 日, University of Melbourne (Australia)
- ⑬ マリイ・クレア、Queer Eye for the Straight Girl?: Queer(y)ing Speech and the politics of consumption, The 11th International Pragmatics Conference, 2009 年 7 月 13 日, University of Melbourne (Australia)
- ⑭ 佐藤響子、Conversation between Young Females Viewed from the Perspective of Japanese Sociocultural Norms, The 11th International Pragmatics Conference. 2009 年 7 月 13 日, University of Melbourne, (Australia)
- ⑮ 中村桃子、Fear of Sliding Down the Economic Gap in Japan. CASCA (Canadian Anthropology Society) and AES (American Ethnological Society) Joint Meeting. 2009 年 5 月 14 日, University of the British Columbia (Canada)
- ⑯ 中村桃子、異性愛の言語資源としての「女／男ことば」、日本語用論学会第 11 回大会、2008 年 12 月 20 日、松山大学 (松山市)
- ⑰ 佐藤響子、お父さん・オレの言うことを聞きなさい: 親の自称詞選択にかかわる規範意識の考察、日本語用論学会第 11 回大会、2008 年 12 月 20 日、松山大学 (松山市)
- ⑱ 中村桃子、Women's and Men's Languages as Twisted Heterosexual Resource., The 5th International Gender and Language Association Conference, 2008 年 7 月 4 日, Victoria University of Wellington (New Zealand)
- ⑲ 佐藤響子、Leadership Norms and the Verbal Behavior of Japanese Female Professors, The 5th International Gender and Language Association Conference. 2008 年 7 月 5 日, Victoria University of Wellington (New Zealand)
- ⑳ 中村桃子、How Metalinguistic Comments Suppress Subversive Practice. The 5th International Gender and Language Association Conference, 2008 年 7 月 3 日, Victoria University of Wellington (New Zealand)
- ㉑ マリイ・クレア、Native Onee:

Gender/sexuality in Japanese, “The 5th International Gender and Language Association Conference, 2008年7月3日, Victoria University of Wellington (New Zealand)

- ② 佐藤響子、Self-reference Forms Used by Japanese Parents and their Norms, The 5th International Gender and Language Association Conference, 2008年7月3日, Victoria University of Wellington (New Zealand)

[図書] (計6件)

- ① 中村桃子、Women’s and Men’s Languages as Heterosexual Resource: Power and Intimacy in Japanese Spam e-mail, Janet Holmes、他編、Cambridge Scholars Publishing、*Femininity, Feminism and Gendered Discourse: A Selected and Edited Collection of Papers from the Fifth International Language and Gender Association Conference (IGALA5)*、2010、250.
- ② 中村桃子、ことばとジェンダー、澤田治美・高見健一編、鳳書房、ことばの意味と使用：日英語のダイナミズム、2010、268-277
- ③ 中村桃子編、中村桃子、熊谷滋子、佐藤響子、マリイ・クレア 他著、世界思想社、ジェンダーで学ぶ言語学、2010、254.
- ④ デボラ・カメロン&ドン・クーリック、三元社、ことばとセクシュアリティ、中村桃子、熊谷滋子、佐藤響子、クレア・マリイ共訳、2009、320.
- ⑤ 林博史、中村桃子、細谷実編著、白澤社、連続講義 暴力とジェンダー、2009、109-149.
- ⑥ 中村桃子、なぜ少女は自分を『ぼく』と呼ぶのか(再録)、天野正子、他編、岩波書店、新編日本のフェミニズム7 表現とメディア、2009、328.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 桃子 (NAKAMURA MOMOKO)
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号：30205372

(2) 研究分担者

佐藤 響子 (SATO KYOKO)
横浜市立大学・国際総合科学部・教授
研究者番号：80235332
マリイ・クレア (MAREE CLAIRE)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：40339213
(H23年1月辞退)

(3) 連携研究者

熊谷 滋子 (KUMAGAI SHIGEKO)

静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30195515